

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の文章を読んで、問一～問六に答えよ。

「清貧」は消極的な禁欲原理としか受取られず、それがアジアの汎神論的な感性をもととした積極的な宇宙との一体化原理であるとまではか
れらには想像もできなかったのである。植物も動物も、花も鳥も、山も川も、すべてが人間と同等な生命の顕現であると感ずる感性を、とくに
ヨーロッパ人に理解してもらおうのはむずかしい。かれらは人間を自然に対して優位に立つ存在と信じ、自然は人間が管理し従わせるべき対象と
こそ見做すが、そこに人間と同質の神性を認めることなど及びもつかない。 **A**、われわれは高山をとくに神性の顕現と認め、「お山に
参詣する」が、かれらは高山を「征服」すべき対象と感ずるらしいところからも、その感覚の違いは明らかだ。そこでわたしはさらにこうい
ふように説明しなければならなかった。

みなさんの中には日本式庭園を見た方もいるでしょうが、あれはまったくヨーロッパ式庭園と違う原理で作られています。われわれが庭園に
求めて来たのはあるがままの自然の再現です。日本の昔の巨匠たちはそこで庭園の中に池を掘り、山を築き、松や竹や、桜や楓や、自然界の
植物を植え、能うかぎりそこに、人間の手で作ったものでありながら人為の影を残さない小宇宙を作ろうとしました。修学院離宮とか桂離宮と
か、江戸時代初期に作られた庭園で今に残されているものを見れば、一目でそのことが納得されるでしょう。

これに反しヨーロッパの庭園は、たとえばウィーンのシェーンブルン宮殿の庭園がそうであるように左右対称のシンメトリックな作りで、幾
何学的な整然たる秩序の実現を目指しています。木々は徹底的に刈り込まれ、もはや樹木としての元の形をとどめぬくらい人為的な形態にされ
ているし、池は完全な円形か四角形で、噴水も人力を誇示するものです。つまりそこでは自然は徹底的に人間に支配管理されていて、その支配
と管理がみごとに行われていることにあなた方は美を感じているようです。

あのシェーンブルン宮殿やヴェルサイユ宮殿の庭園を見たときわたしは、しかし、そこにただ王侯による富と力の誇示しか感じませんでした。
かれらは自然をさえも完全に支配することで、その力が神にヒツテキするくらい強いことを示したがっているのか、と思ったほどです。

この感性の違いは非常に大きく、根本的で、わたしはここで西欧文化と日本文化の比較論をやるうとは思いませんが、わたしの好みからい
え、わたしはシェーンブルン庭園の整然たる秩序に感心はするが美しいとは感じない。だいたいわたし以上の年輩の日本人ならたぶんそう感
じるはずで、いつかドウホウの老年の教授をシェーンブルン庭園に案内していったら、教授は庭園全体を見下ろす台に立って見直し、「ふん、こ
れだけのものか」と言っつて、それ以上見て回ることを拒否したものでした。 **B** 帰りの車の中であれに較べたら日本の庭園がどんなに美
しいかを縷々力説していました。

この老教授の意見はわたしにも納得のいくもので、日本の住居は庭園ばかりでなく家屋も自然にたいして同化しようとしているのです。西欧
の家屋が外部に対して内部を閉し、自己防衛的、閉鎖的であるのにたいし、日本家屋は広い開口部を設けて自然に向かつて自己を開放していま
す。内部にも閉鎖空間を作らず、襖あるいは障子といった自由な間仕切りによって区切られるだけで、ふだんはそれも開放され家の中全体が
外の自然とつながりあっています。風も光も自然はその表情をそのまま家屋の中に持ちこみ、人は家の中においても自然の変化をとものにできるの
です。日本の気候が温和だからできることですが、われわれはそういう自然と一体になった住居を理想として来たのです。だからそれは草庵
の思想の延長といってもよかったですでしょう。

現在、日本では家屋は財産にして消費材と見做され、建てかえるときなどは大型クレーンで一挙に叩き潰し、全部を同じ一つのゴミにしてし
まいます。建てかえ作業のたびにそういう無残な光景に接してわたしは悲しくなりますが、かつては絶対にそんなことはしなかった。瓦は瓦で
一枚一枚テイネイにはがし、古瓦ですが使用に耐えうるかぎり安建築用に再利用したのです。柱も桁も貫もすべて木材部は解体し（解体しうる
ように組立てられていました）、もう一度別のところで組立てて使いました。

家屋はそんなふうには、自然に対して開放され自然とともにあると同時に、解体再利用されるものとしてもあったわけで、われわれの祖先は
およそものをムダにすることがなかったのです。

われわれの祖先は自然と同化し、自然の中にあつてその幽氣にひたることを好んだのです。池大雅は南画といわれる中国の山水画を学ぶとこ
ろから出発し、彼もまた好んで深山幽谷の中に仙人（脱俗の人びと）が住む風景を描きました。その画題はもと中国の文人に好まれたもので、
中国文化にも自然との合体をよしとする風があつたわけですけれども、大雅とその時代の人びとは、自然のなかの亭という小さな住居に住み、
利得の世間から遠く離れて脱俗の生活をするを、なによりもの理想としたのでした。

(中野 孝次、『清貧の思想』より)

国語「問題その二」

(21-1B)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

(注) かれら ここではヨーロッパ人を指す。

桁 家屋の柱と柱の間の長辺にかける水平の材木。垂木の上に渡す。

貫 木造建築で柱等の垂直材間に通す水平の材木。柱の中間に渡す。

池大雅 江戸時代の文人画家、書家。

問一 傍線部①～⑤の漢字の読みをひらがなで示し、カタカナを漢字に直せ。

- ① 顕現 ② 誇示 ③ ヒツテキ ④ ドウホウ ⑤ テイネイ

問二 A、B に適する接続詞を次のア～オから選び、記号で記せ。

- ア すなわち イ そして ウ したがって エ しかし オ たとえば

問三 傍線部(1) 「汎神論的な感性」について、具体的に説明している表現を本文から四十五字以内で抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問四 傍線部(2) 「その感覚の違い」について、ヨーロッパ人の美の感じ方を説明している箇所を本文から四十字以内で抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問五 傍線部(3) 「わたしはシェーンブルン庭園の整然たる秩序に感心はするが美しいとは感じない」と述べているのはなぜか。その理由を、三十字以内で文中から書き抜け。

問六 傍線部(4) 「自然と同化し、自然の中にあつてその幽ゆう気きにひたること」とはどのような状態をいうのか。文中の語句を用いて具体的に四十字以内で説明せよ。また、そのような考え方を端的に表現している語句を五字以内で書き抜け。

国語「問題その二」

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

知人からこんな話を聞いた。ある人が、京都の嵯峨で月見の宴をした。もともと月見の宴というような大袈裟なものではなく、集って一杯やったのが、たまたま十五夜の夕であったといったような事だったらしい。平素、月見などには全く無関心な若い会社員たちが多く、そういう若い人らしく賑やかに酒盛りが始まったが、話の合い間に、誰かが山の方に目を向けると、これに釣られて誰かの目も山の方に向く。月を待つ想いの誰の心にもあるのが、いわず語らずのうちに通じ合っている。やがて、山の端に月が上ると、一座は、期せずしてお月見の気分に支配された。暫くの間、誰の目も月に吸寄せられ、誰も月の事しかいわない。

ここまでは、当たり前な話である。ところが、この席に、たまたまスイスから来た客人が幾人かいた、彼等は驚いたのである。彼等には、一変したと見える一座の雰囲気が、どうしても理解出来なかった。そのうちの一人が、今夜の月には何か異変があるのか、と、茫然と月を眺めている隣りの日本人に、怪訝な顔で質問したというのだが、その顔附が、いかにも面白かった、と知人は話した。

スイスの人だって、無論、自然の美しさを知らぬわけはなかったろうし、日本にはお月見の習慣があると説明すれば、理解しない事もあるまい。しかし、そんな事は、みな大雑把な話であり、心の深みにはいつて行くと、自然についての感じ方の、私たちとはどうしても違う質がある。これは口ではいえないものだし、またそれ故に、私たちは、いかにも日本人らしく自然を感じているについて平素は意識もしない。たまたまスイス人といっしょに月見をして、なるほどと自覚するが、この自覚もまた、一種の感じであって、はつきりした言葉にはならない。スイス人の怪訝な顔附が面白かったでスマスよりほかはない。

この日本人同士でなければ、容易に通じ難い、自然の感じ方のニュアンスは、在来の日本の文化の姿に、注意すればどこにでも感じられる。特に、文学なり美術なりは、この細かな感じ方が基礎となつて育つて来た、といえば、これはまずタイガイの人々が納得している事だろう。ところが、近代化し合理化した、現代の文化をいう場合、そんな話を持出すと、ひどく馬鹿げた恰好になる。何か全く見当が外れた風になるのはどうしたわけか。細かな感受性の質などには現代文化は本当に何の関係もないものになってしまったのか。それとも、そんな風な文化論ばかりが流行し、文化に関心を持つとショウスル人々が、そんな文化論ばかりを追っているという事なのか。

意識的なものの考え方が変つても、意識出来ぬものの感じ方は容易には変らない。いつてしまえば簡単な事のようにだが、年齢を重ねてみて、私には、やっとその事が合点出来たように思う。新しい考え方を学べば、古い考え方は侮蔑出来る、古い感じ方を侮蔑すれば、新しい感じ方が得られる、それは無理な事だ、感傷的な考えだ、とやっとはつきり合点出来た。何の事はない、私たちに、自分たちの感受性の質を変える自由のないのは、皮膚の色を変える自由がないのとよく似たところがあると合点するのに、随分手間がかかった事になる。妙な事だ。

お月見の晩に、伝統的な月の感じ方が、何処からともなく、ひよいと顔を出す。取るに足らぬ事ではない、私たちが確実に身体でつかんでいる文化とはそういうものだ。古いものからタツキヤクする事はむずかしいなどと口走つてみたところで何がいた事にもならない。文化という生き物が、生き育つて行く深い理由のうちには、計画的な飛躍や変異には、決して堪えられない何か^④が在るに違いない。私は、自然とそんな事を考えこむようになった。年齢のせいには違いないが、年をとつても青年らしいとは、私には意味を成さぬ事とも思われる。

(小林 秀雄、『考えるヒント』より)

(注) 問題文のなかには、問題作成者が必要に応じてふりがなを付した箇所がある。

国語「問題その四」

(21-IB)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部①～④のカタカナを漢字に直せ。なお、必要に応じて送り仮名もつけよ。

- ① スマス ② タイガイ ③ ショウスル ④ ダツキヤク

問二 傍線部(A)、(B)の語句の意味として適当なものを、それぞれア～オから一つ選び、記号で記せ。

(A) 「期せずして」 (B) 「茫然と」

- | | |
|----------|-----------|
| ア 何気なく | ア 息をのんで |
| イ 運悪く | イ 取りとめなく |
| ウ 望みなく | ウ 身動きせずに |
| エ 思いがけなく | エ うつとりして |
| オ 時を忘れて | オ じっと見つめて |

問三 傍線部(1) 「彼等は驚いたのである」とあるが、どのようなことに驚いたのか。四十字以内で説明せよ。

問四 傍線部(2) 「それ故」とは、どのような理由か。三十五字以内で説明せよ。

問五 傍線部(3) 「この日本人同士でなければ、容易に通じ難い、自然の感じ方」とあるが、この「感じ方」として該当しないものを、次のア～オから二つ選び、記号で記せ。

- | | | |
|---------------|--------------|----------------|
| ア 合理的意識的なもの | イ 細かな特質のあるもの | ウ 表現することが困難なもの |
| エ 言葉で対象を捉えるもの | オ 普段は意識しないもの | |

問六 傍線部(4) 「新しい考え方を学べば、古い考え方は侮蔑出来る、古い感じ方を侮蔑すれば、新しい感じ方が得られる、それは無理なことだ、感傷的な考えだ」について、このように言うのはなぜか。その理由に当たる部分を、本文から四十字以内で抜き出し、はじめと終わりの七字で記せ。(句読点を含む)

問七 傍線部(5) 「お月見の晩に、伝統的な月の感じ方が、何処からともなく、ひよいと顔を出す」とはどういうことか。内容全体をふまえて七十字以内で説明せよ。

国語「問題その五」

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3 次の文章を読んで、問一～問五に答えよ。

中国から渡ってきた原色には四つしかありません。青と赤と白と黒です。のちに真ん中に黄色を置いた。これは皇帝をあらわしたもので、別格です。原色はやはり四つと考えていい。緑もまた青に含まれるのが文化としての色です。ですから緑の若葉が燃えるような山を見ても、私たちは「青々とした山」と言って、「緑々とした山」というふうには言わないのです。信号の「青」も緑でなくて青でいいのです。「青」のなかに、ちゃんと緑も入っているのですから。

このように原色というものは、文化のなかで大きな役割を果たしているわけですが、この四つの色が決まったのは、もとは秦^{しん}の始皇帝のころ、のちに^①セイレキゼロ世紀、漢の武帝のころに決定的になったと言われています。この秩序は、色を四つに決めただけではなくて、同時にいくつかのことを、これで指示しました。何を決めたか。たとえばこれで方角を決めます。青は東、赤は南、白は西、黒は北というふうに。色と方角とが、ある一致した形で、秩序づけられたわけです。

同時にこれは、季節の移りかわりを示します。青春、**A**夏、**B**秋、**C**冬という言葉の示すとおり、青が春、赤が夏、白が秋、黒が冬ということになります。四季が平等にめぐっているところでは、一年を四つに分けて、それぞれの季節のめぐりを秩序づけるというのは、カシコ^②知恵でした。**C**しかし南半球へ行きますと、こんなことは通用しません。雨期とカンキ^③がほとんどを支配していますから、春夏秋冬というふうにめぐることができません。**D**

このあいだ、ブラジルへ行って、ブラジルの二世の人に聞いた話ですが、「日本人はひじょうに幸せだと思う。同じところにおいて一年間たえず旅行している感じだ」というわけです。**E**

(多田道太郎、『周辺の日本文化』より)

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に直せ。なお、必要に応じて送り仮名もつけよ。

- ① セイレキ ② カシコイ ③ カンキ

問二 文中の**A**、**B**に適する漢字一字をそれぞれ次のア～カから選び、記号で記せ。

- ア 紅 イ 陰 ウ 朱 エ 丹 オ 闇 カ 白

問三 本文中には、「シーズンがうまくめぐっているということなんです。」という一文が抜けている。文中の**C**～**E**のどこに挿入するのがよいか。記号で記せ。

問四 文中には漢字の使い方が通常と異なる箇所が一つある。文中より書き抜き、通常使用される漢字に直せ。なお、必要に応じて送り仮名もつけよ。

問五 「青龍」、「玄武」という神獣は、それぞれの方角を守るものとされているか。

